C. BECHSTEIN KLAVIERSCHULE
ベヒシュタイン シューレ
ベヒシュタインから見える風景
～音楽表現の上達のヒント、ベヒシュタイン・ジャパン主催イベントのレポート等をお届けします～
Nr. 4 2021.01

BECHSTEIN KLAVIERSCHULE
ピアノ教育の現場から——

ベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、音楽をより深く理解するピアノ教育を実践している内藤晃先生と石本育子先生のお二人による「ベヒシュタイン シューレ誌上特別レッスン」。第3回目の今回は「ひとりでアンサンブル」をテーマにお届けします。

内藤晃先生のレッスンが開講されました

2020年12月4日（金）に汐留ベヒシュタイン・サロンにて内藤晃先生によるベヒシュタイン シューレのリアルレッスンが開講されました。
当日ご受講いただいた方からコメントをいただきましたのでご紹介します。

受講者の声
数十年ぶりのブランクを経て自己練習を再開しましたが、理想の音色に近づけない状況に限界を感じ、勇気を出してレッスンを申し込みました。
一通り弾き終わると、自身でもうっすら認識していた問題点をすぐに指摘していただき、全体の構成を理解した上でバランスをコントロールする方法や手指の構え方、和声の一音一音に神経を行き渡らせつつ、脳内では常に次の音を意識する必要がある等、多くの示唆に富んだポイントを大変わかりやすく伝えてくださり、その後の練習の仕方が様変わりしました。
（Y様）

第2回のレッスン開催も現在検討中です。開催時期など詳細が決まり次第本紙およびベヒシュタイン・ジャパンのホームページにてお知らせいたします。
https://www.bechstein.co.jp

「一人何役も弾く」ということ

内藤　晃
（ピアニスト）

石本 育子
（たかまつ楽器ピアノ講師）

加藤 正人
（ベヒシュタイン・ジャパン代表）

石本：内藤先生とよく話してることに「普遍的なものを伝えたい」という共通した想いがあるのですが、「普遍的なもの」というのはそんなに多いわけではあないと思っていて。
その中の１つにピアノの楽譜の読み解きがあります。

内藤：88の鍵盤で広い音域をカバーするピアノでは、メロディー、内声、ベースラインと一人何役も演じることになります。このすべてのパートに血を通わせていいアンサンブルにするのが至難ですね。どうしてもメロディー以外の要素が「メロディーの付属物」みたいになってしまいがちです。

石本：そうですね、ですのでまだ小さくてさほど複雑ではない曲のうちから、構造を理解して弾く脳を育てるのがよいと思っています。
例えばブルグミュラーで言えば25番もいいのですがもう少し声部が見えてくる18番が適していると考えています。

内藤：個々の声部がどんなパート譜になるか、分解して感じてみることによって、声部の抑揚とアンサンブルが自然になりますよね。パート譜のメロディラインが違うのだから、当然声部が違えば異なったカーブを描いていくわけで、これが「一人何役も弾く」基礎だと思っています。

石本：例えば第９曲の「朝の鐘」ではＡＢＡの３部形式のＡでは上声部は常にＥ♭で鐘の音だったものが、Ｂでは２声のアンサンブルになる。複雑な絡み合いはないのですが、ここでは各声部の抑揚があり、Ａより脳を使います。
バスの動きと和声を感じながらそれをしていくので、子供たちにとっては楽ではなくなりますが、面白いと思ってもらいたいですね。

内藤　晃
（ないとう あきら）

ピアニスト、指揮者、作編曲家。東京外国語大学ドイツ語専攻卒業。在学中よりピアニストとして演奏活動を始め、桐朋学園大学指揮教室、ヤルヴィ・アカデミー（エストニア）などで指揮の研鑽も積む。
弾き振りを含む多彩な演奏活動とともに、「もっと深い音楽体験」を共有すべく、ユニークな発想でレクチャーや執筆を行う。月刊音楽現代に「名曲の向こう側」を連載。訳書にA.ゲレリヒ著「師としてのリスト」（近刊、音楽之友社）、校訂楽譜に「ジョン・アイアランド ピアノ曲集」「13人の女性によるピアノ小品集」（カワイ出版）などがあるほか、音楽雑誌やCDライナーノートの執筆も多い。札幌シンフォニエッタ、アビアント交響楽団、杉並グース合奏団などを指揮。
2014年、全日本ピアノ指導者協会から新人指導者賞受賞。一次資料から作曲家の美意識を読み解く独自のレッスンが各地で好評を得ている。
CDに「Primavera」（レコード芸術特選盤）「言葉のない歌曲」（同準特選盤）などがあるほか、マリンバ吉川雅夫氏や作曲家春畑セロリ氏のCDでピアノを務め、一流ソリストや作曲家からも厚い信頼を寄せられている。主宰ユニット「おんがくしつトリオ」では教育楽器によるエキサイティングなアレンジが人気を博し、全国各地に招かれている。
www.akira-naito.com

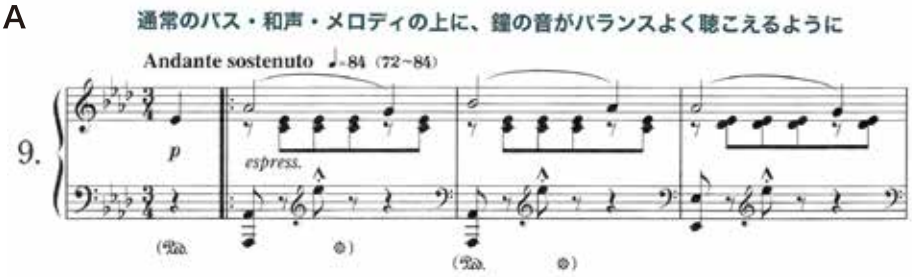
石本 育子
（いしもと いくこ）

静岡県浜松市出身。信愛学園高等学校音楽科を経て武蔵野音楽大学音楽学部声楽学科卒業。古屋豊、川内澄江の各氏に師事。
東京・浜松・香川において数多くのコンサートに出演するだけでなく、自主企画の演奏会を立案運営。
独自の指導法による連続講座をピアニスト内藤晃氏と共に汐留ベヒシュタインサロンにて開催。
たかまつ楽器青い鳥音楽教室主事。青い鳥マスタークラス主任講師。四国二期会会員。
全日本ジュニアクラシック音楽コンクール及び東京国際ピアノコンクール審査員。

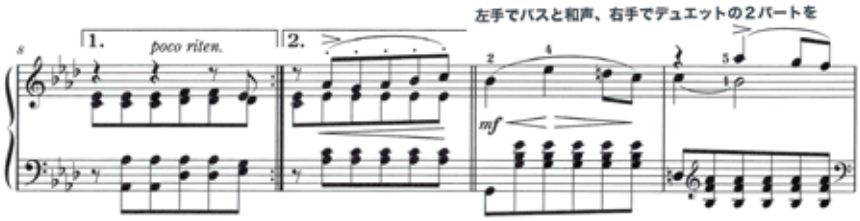
加藤　正人
（かとう まさと）

ドイツ・ピアノ製作マイスター称号を取得
現在ベヒシュタイン・ジャパン代表取締役社長

A



B



内藤：ところで、ベヒシュタインの澄んだ響きで弾くと、各声部の横方向の動きもくっきりと聴こえますから、血が通い切っていない声部が浮き彫りになって、アンサンブルの精度を高めていくのにうってつけですね！

加藤：ベヒシュタインの設計・製作思想の一つに<人の声のように抑揚をつけられる音造りができるピアノ>という考えがあります。
同じ言葉からも人の声は、抑揚の変化で喜怒哀楽を感じることができますね。ある声部に異なった抑揚をつけることによって、和音の泉の中から感情を強調した声部として浮き立つわけです。音量だけのアプローチとは異なる効果です。ベヒシュタインの独特な倍音構成は、***p***（ピアノ）から***mp***（メゾピアノ）でも色彩の変化をつけやすくしています。この概念は100年前から現代に引き継がれる重要な要素の一つです。

石本：逆に、音符を1つ1つの記号としてパソコン入力するように打鍵していることも、また音符を縦に和音として読んでいることも、バレてしまいますね。
ベヒシュタインで弾いていると否が応でも繊細な耳が育っていきますね。

内藤：楽譜を、パート譜の集積したスコアとして、ミルフィーユのように感じられるといいです。そのためには、ピアノ曲として書かれていても、作曲家の脳内でどのような編成・スタイルが想定されていたか、鍵盤上にアウトプットされる前のサウンドを思い描けるといいですね。10本の指で広範囲の音域をカバーするピアノは、歌や室内楽、オーケストラまで、あらゆるスタイルの音楽を翻訳可能な、万能楽器なわけです。

内藤先生、石本先生がお感じになっているベヒシュタインピアノの特性を活かしながら、
実際どのように生徒さんたちに音楽を理解させていらっしゃるのか、
誌上レッスンと動画をリンクして公開いたします。

「ショパンの今と昔の響き」
ピティナ・ピアノセミナーより

日時：2019年7月21日(日)
会場：汐留ベヒシュタイン・サロン
講師：宮谷理香、飯野明日香

ピティナの汐留イタリア街ステーションでは様々なテーマで講師をお招きしてセミナーを行っています。汐留ステーション代表のピアニスト飯野明日香先生はベヒシュタイン・ジャパンでもフォルテピアノ・モダンピアノのレッスン指導、イベントを精力的に行っておられます。

今回はショパン演奏における第一人者であるピアニスト宮谷理香先生をお招きし、飯野明日香先生と共に「ショパンの今と昔の響き」と題したセミナーを行っていただきました。当日会場には、モダンピアノのベヒシュタイン（フルコンサートグランド）とフォルテピアノのトレンドリン（1835年製 音域：F1～g4の6オクターヴ＋1全音）の二台が並べられ、ショパンが当時実際に演奏していたピアノの響きを体験しながら現代のピアノでショパンを演奏する際に考えるべきこと、弾き方の秘訣を伝授していただきました。

■当時のフォルテピアノと現代のピアノとの違い（飯野）

今回使用するトレンドリンという楽器は1835年に作られたもので、ショパンが生きていた時代とほぼ重なります。簡単に当時の時代背景を振り返りましょう。

フランス革命(1789年)を機に、18世紀後半から19世紀にかけて文化の担い手が教会や王侯貴族から資本を持ったブルジョワという中産階級へと変わってきました。このブルジョワは貴族的なステイタスを求め、そこでこのピアノという楽器が目玉に上がりました。ピアノを持ち、子女に習わせるということは一種のステイタスでした。当時の女性には、ある程度の教養や音楽の嗜みが求められ、需要も高まり、子女向けのたくさんの曲が生み出されました。

ここからはピアノのお話。代表的なピアノのアクション3つのタイプについて整理しておきましょう。

1. ウィーン式アクション（シングルエスケイプメント）	19 世紀初頭当時の主流で、今回使用されるトレンドリンもこのタイプ。軽い繊細なタッチで一音一音コントロール、テクニックが必要。
2. イギリス式アクション	跳ね返り式アクションによって力強く張りのある音が出る。1に比べてパワーを必要とする。
3. ダブルエスケイプメント	今のピアノの原型。フランス人のエラールが1821年に発明。1・2に比べ、さらに大きな音が出る。連打が可能で、オールマイティ。ショパンが体調の悪い時に弾いたという。

そして、これに加え、プレイエル。プレイエルといえば、今日ではショパンが愛奏していた楽器メーカーとして知られていますが、作曲家・演奏者でもあり、ショパンはプレイエルを音楽家としても認めていたことを裏付ける証言が残されています。このように、音楽的な感性の点でも結びつきが強かったということが分かります。

この後、宮谷先生に交代し、ショパンの人物について、ショパンの手について等の興味深いお話が展開されました。そしてその後、飯野先生がトレンドリン、宮谷先生がベヒシュタインを弾きながら、実際の作品へアプローチをされました。

■ノクターン第8番 Des-dur op.27-2

♪（トレンドリンで飯野先生冒頭を演奏。）

宮谷：繊細なコントロールですね。

飯野：柔らかいですよね。これを弾くときは手の甲が非常に大事です。フォルテピアノを習い始めて必ず言われることが、「力で押すな」。もし力で弾けば、楽器が悲鳴を上げて声を出さなくなります。

宮谷：実演していただけますか？
（実験後）…… 力で押すと、倍音が消えてしまうのですね。

飯野：そうなんです。力を抜いて弾くと、弦振動と共鳴をともにやりながら、お互いが歩み寄った響きを作っていけます。そしてペダル。残響が短いからペダルでもあまり濁らない。その分、響きを足していかなければ音が出ません。

宮谷：モダンピアノも力を入れすぎると、弦の響きがなくなってしまいます。ただ、打鍵の瞬間の指先のコントロール、一瞬でコントロールして重さを載せていかないといけない、その辺りがトレンドリンと違うところなのだと思います。モダンピアノで弾くとどうなるでしょう？
～♪（ベヒシュタインで宮谷先生が演奏。）

飯野：モダンピアノもメーカーによって全く特色が異なりますけれども、今日はこのベヒシュタイン。感触はいかがですか？

宮谷：今日ベヒシュタインを弾いてみて感じたのですが、伴奏部分と旋律が、それぞれの音域で必要な役割を果たしてくれます。各音域で粒立ちが良い。なので、このトレンドリンと通じるところがあると思いませんか？**【譜例1】**

【譜例1】

飯野：そうですね。ベヒシュタインはフォルテピアノのシステムが一番現代でも生かされています。ベヒシュタインはなんとプレイエルの工場に弟子入りしていたという歴史があります！各声部の混じり合いが少ないという特徴が、受け継がれています。

宮谷：現代のピアノには珍しいですね。現代のピアノは他のメーカーだと、融合されたものを作り、その上でうまくバランスをとっていきます。なので、ベヒシュタインのピアノを初めて弾かれた時にもしかしたらバランスがとりにくい、と感じた経験がある方もいらっしゃるかもしれませんが、それはそのような側面があるからですね。

飯野：バランスということで言えば、フォルテピアノでは弾きにくいと思う箇所があります。右手の旋律が三度の和音で進行する部分。モダンピアノだと、よりバランスをコントロールできますが、フォルテピアノではちょっとしたバランスコントロールのこつが必要なのです！！

宮谷：モダンピアノでは下声部はすごく小さく上の声部をより輝かせようとバランスをコントロールします。**【譜例2】**

飯野：同じことをフォルテピアノでやろうとしても、あんまり差がない。だけど、響きとしては完結している。

宮谷：ああ、美しいですね！！でもその響きをモダンピアノでそのまま再現しようとすると、美しくない。やはりすごくバランスを取ります。あるいは、繊細さを生かして、煌びやかさはないけれどとても繊細な柔らかい音色で弾くこともできます。

飯野：小さい連符の連続する箇所**【譜例3】**などは意外と弾きづらい。フォルテピアノの鍵盤はモダンピアノに比べ、三分の一くらいの重さしかないといわれているにもかかわらず、粒を揃えにくくとても弾きづらいです。モダンピアノだといつも通り弾けるのに。

宮谷：そうなのですね！ここでは48個の小さい連符で書かれていますが、これを一つの箱（小節）に入れなければならないため、普通速く弾きます。モダンピアノでは速く弾けてしまうのですが、速く弾くと、ポーランドの先生は結構嫌がります。ひとつひとつの音がたとえ小さい音であってもすべて意味があるのだから速く弾くな、と。全部「言葉」なのだから言葉の震えが伝わるように弾きなさい、と教わるんです。まさしく今、飯野先生が仰ったようなことです。

飯野：モダンピアノだと簡単にできてしまうのに、これでは早く弾くことができないのです。粒立ちが悪い。逆に言えば、一音一音すべて言葉を持っている。

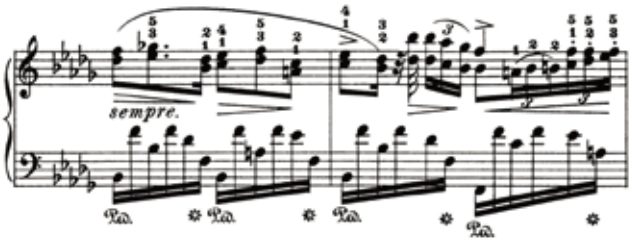
宮谷：一つ一つの音を伝えるようなつもりで、立ち上るように大事にひかなくてはいけないということですね。

■ノクターン第7番　Op.27-1

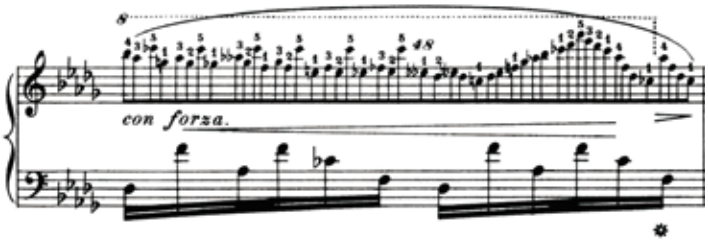
飯野：シャープ系からフラット系に転調するところはあまり意識しなくても自然に色が変わってくれる。放っておいても気持ちよく混ざってくれる。でもモダンピアノだと難しいと思いませんか？

宮谷：そうですね。ショパンの曲を弾くときは特にバランスが大事です。右と左だけではなく、和音のバランス、バスの音の後に続く和音を弾くときのバランス。そして、その理由が（トレンドリンを聞いて）すごくわかりました。ショパンがフォルテピアノで作曲していたということ。つまり、その最大音量を考えて演奏しなくてはいけない。その中で作られていた世界なのだろう、ということ。自分の一番出る音量はクライマックスまで取っておかなければなりません。その他の盛り上がるところで *f* が出てきても、最大を見せてはいけないのです。人は一度大きい音を聞いてしまうと、それ以上の大きな音の認識が難しくなるといわれています。クライマックスでないところは、さらにコントロールした音量とバランスが要求されるということですね。

【譜例2】



【譜例3】ノクターンop.27-2　48連符



■ワルツ第10番　h-moll Op.69-2

飯野：最後に聞いておきたいのが、ワルツ。ワルツのテンポ設定はどのようにしたらよいのでしょうか？

宮谷：ショパンのワルツを弾く上で考えなくてはならないのは、踊りのワルツと、抒情的な歌うような曲としてのワルツ。1・2番は踊りの部類、3番や7番は抒情的な繊細なもの。そしてこの10番も後者のタイプ。抒情的なタイプのワルツでは、1、2、3、と前者のタイプのように（リズムを強調して）弾く必要はありません。複数回出てくるのでたまにはそのように弾いても良いかもしれませんが。

でも、ショパン演奏では二度同じことは絶対に弾きません。すべて変えます。一度目はできるだけシンプルに、テンポもできるだけ揺らさず、ルバートは最小限に。日本のご飯を紹介する時に、まずは白いご飯をそのままお出しするように。2回目、3回目、4回目は自由に揺らしても自然に感じますが、1回目であまり揺らすと酔っ払いのようになってしまいます。

楽器と奏法を一緒に考えていくと、新たな視点が生まれ、表現の幅も広がりますね。

ここで一部が終了、後半はレッスンとミニコンサートでした。ショパンをテーマにフォルテピアノとベヒシュタインピアノを用いて宮谷先生、飯野先生の息の合ったお二人の対談・演奏形式で進み、とても実用的な内容でした。ショパンの容姿などの意外な視点から当時の時代背景、ピアノのアクションの話まで内容は多岐にわたり、ピアノ学習者でなくても楽しめるのではないかという盛り沢山な内容でした。

（文責：前田、白川）

宮谷理香オフィシャルサイト
http://www.miyatani.jp/rika/

飯野明日香HP
https://www.askaiino.com

【引用楽譜】
Petrucci Music Libraryより引用
・F.Chopin：Nocturn　Des dur　Op.27-2
https://imslp.simssa.ca/files/imglnks/usimg/9/92/IMSLP115009-PMLP02305-mendelssohn_op16no2_sibley.1802.2379.pdf

BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

石本育子 先生　特別誌上レッスン③

石本先生
レッスン動画

https://youtu.be/-qeSK-IPRWg

QRコード読み取りアプリでご覧ください。

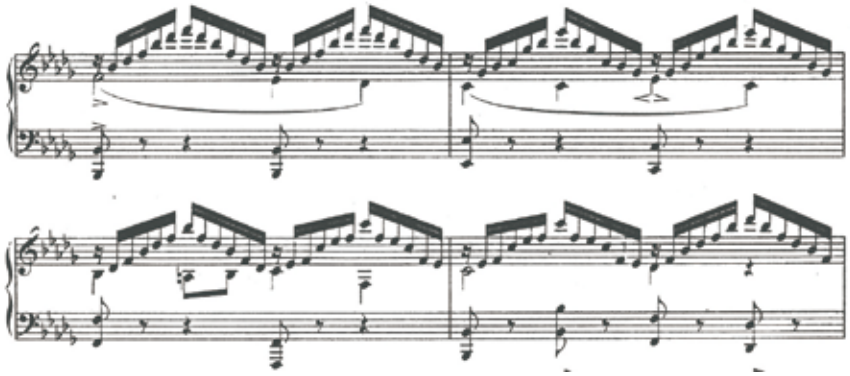
石本先生

Mさん

ひとりでアンサンブルを（基礎編）

前回に引き続き、大人の方のレッスンです。子育てをされながら、大好きなピアノを楽しく深く学ばれています。

メンデルスゾーン：3つの練習曲よりop.104-1



石　本：この曲の構造はどうなっていると思われますか？

Mさん：バスと高音のアルペジオの間にメロディがある形です。

石　本：そうですね、内声がメロディという少々弾きにくい形ですね。右手に山型のアルペジオがあると、和声の役割なのについつい過剰に歌わせたくなるので気をつけて弾いてみてください。

Mさん、弾いてみる。

石　本：どうですか？

Mさん：わあ、難しい！右手はメロディを担当することが多いのでつい歌わせてしまいます。

石　本：そうですね。山型のアルペジオですがメロディラインを描こうとイメージせずに「色塗り」をイメージしてみてください。その際、和声の機能(トニック・サブドミナント・ドミナント)や調性の変化にも気をつけてください。

Mさん：はい。でもこれをしながらメロディは歌を歌うように演奏するんですよね。そしてバスもあって…

石　本：そうなんです。バスにはバスの独立した動きがあって、まるで３人がアンサンブルをしているように演奏しなくてはなりません。

Mさん：私はこの曲の内声にあるメロディを美しいと感じて、弾きたくなったのですが、和声・メロディ・バスそれぞれをちゃんと演奏しようと思うと本当に難しいです。以前はたくさん練習すれば上手くなれると思っていたんですが、構造を理解してピアノを弾くって、身体じゃなくて頭を使うことなんだなあ、とわかってきました。

BECHSTEIN KLAVIERSCHULE

内藤晃 先生　特別誌上レッスン③

内藤先生
レッスン動画

https://youtu.be/w8QkKt1GYlI

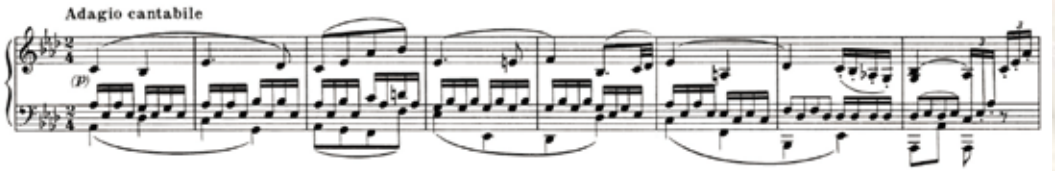
QRコード読み取りアプリでご覧ください。

内藤先生

Hさん

ひとりでアンサンブルを（応用編）

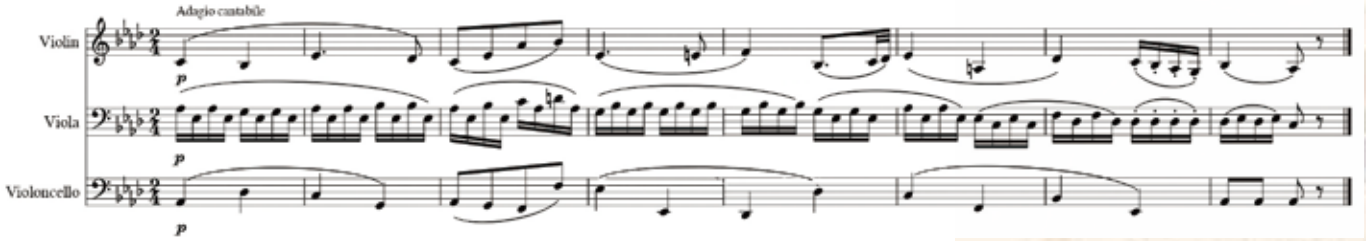
内　藤：悲愴ソナタの第２楽章を、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロの三重奏に見立てて、パート譜に分けてみたんだけど、僕がヴァイオリンとチェロを弾くから、Hさん、ヴィオラパートを弾いてみて。



（２台ピアノで合奏）

内　藤：ひとりで全部弾いたときと比べてどうだった？

Hさん：三者三様の役割が見えてきました。ヴィオラの16分音符が、音楽を前に進めていくんですね！



内　藤：そう！ひとりで弾くと、右手で２パート取るから、上のヴァイオリンの旋律を歌いたいところで逐一ヴィオラがもたついたりしがちだけれど、パート譜見て合奏すると、まず、そうはならないよね！

Hさん：そうですね！16分音符が並んでる譜面を見ると、前に流れていきたいです。

内　藤：このように、それぞれの人は、パート譜を見ながら演奏するから、パート譜のメロディーラインに導かれて心動かしていくことになるんだ。上行下行や跳躍など、描くメロディーラインが皆違うから、各々違う軌跡を描いていって、その交錯や重なりが、互いを触発して心の化学反応みたいなものを生んでいる。

Hさん：今まではソプラノ以外のパートがソプラノにくっついて平行移動しちゃってたかも…。

内　藤：そうすると人格がひとつになって、アンサンブルに聴こえないよね。それと、タテのタイミングが合いすぎても窮屈。実際のアンサンブルでは、パート譜のメロディーラインによって自然な伸縮が生まれるから、フレーズ内部ではわずかなズレを伴うはず…。一人何役も演じ分けるのが、ピアニストの難しさでもあり、醍醐味でもあるよね！

イラスト：いとう まりこ

株式会社ベヒシュタイン・ジャパン　〒157-0061 東京都世田谷区北烏山9-2-1
TEL：03-3305-1211　FAX：03-3305-9931
HP：https://www.bechstein.co.jp/
発行人　加藤正人・営業企画室